

平家納経雑感

梶谷亮治

一 平家納経の問題

平清盛(一一一八〜八二)の「願文」によれば、法華経が形となって顕れたものが観音菩薩であり、その観音菩薩が神となって化現したのが厳島社の祭神である伊都伎島大明神であるという。清盛は因縁あってこの伊都伎島神を欽仰し、現世の栄華を感謝し来世の妙果を願ひ、法華経一部二十八品、無量義・観普賢・阿弥陀・般若心等経各一卷を書写しこれを金銅篋一合に納めて宝殿に安置した(ただしこのうち現存の般若心経は、奥書にある通り、仁安二年(一一六七)清盛が太政大臣に任じた折りに新たに書写、奉納したものであり、清盛願文に云う当初の般若心経とは取り替わったものである)。さらには爾後法華三十講を年事として開筵し、社殿を「真如之宮」と荘厳し、供物を捧げるなど厳島社への帰依を誓い、重ねて往生極楽を願っている。

法華経見返絵のなかで、この平家納経の見返絵は変化にとんでいてまことに興味深い存在である。『法華経一写経と荘嚴』⁽¹⁾や『仏教説話絵』⁽²⁾でとり上げ、私なりにいささかの考察を続けてきたが、最近になって清盛の生涯やその信仰に注目して、平家納経の成立にかかわる新たな可能性を推測するようになった。こうした考えを、機会を得て平成十一年六月四日に国文学研究資料館「絵本の会」研究会で報告した。

平家納経の見返絵は、表現の内容や技法からしていくつかのグループ

に分類することができる。そのことには何度もふれてきたが、簡単に記すと細密技法で法華経各本の経意を描いたグループと、物語絵の表現をかりて宮廷の信仰生活を描いたグループ、それに蓮池図・獅子図・荘厳具などの人事以外を表現したグループとがある。また経意絵グループの中はそれまでの我が国の紺紙経見返絵にも描かれてきた図様の系統上にあるものと、新たに中国・宋から紹介されたと推測される宋風様式の図様によるものがある。平家納経にはこのように一見不統一な多種多様の見返絵が描かれていて、そのことが常に気がかりなこりとなつて意識のかたすみに浮遊する。そうした不統一の中で、いわゆる物語絵様を描かれた見返絵の意味するものは何か、考えてみたい。なぜ宮廷生活という(それが信仰生活の表現であったとしても)、經典から離れた現世のモチーフに引き寄せて見返絵が描かれたのだろうか。しかも、平家納経ではこうした見返絵をそなえる経巻は金銀荘経篋に納められており、その経篋は(側面で)宝珠を持つ龍が次第に上昇しつつ、ついには(蓋表で)二頭ながら靈氣の中にその宝珠を五輪塔中に奉献したごとくであり、宝珠と舍利(を納める塔)とを同視したと思われるきわめて密教的なモチーフに荘嚴されていて、さらに複雑な信仰背景が想像されるのである。

二 祇園女御と清盛の信仰

平家納経経篋の荘嚴について河田貞氏は、それが法華経提婆品の龍女

成仏の表現であろうとされながら、蓋表に二頭の龍が向き合いその上方に五輪塔が浮かぶという異例の図様に注目され、如意宝珠法の本尊画像である摩尼宝珠曼荼羅との形式の近似に注意された⁽³⁾。摩尼宝珠曼荼羅の現存最古の作例とみなされる仁和寺の白描図像本は長寛から承和年間の成立であり、平家納経当時にこうした図様がすでに成立していたことを示されたのは新しい知見である。また最近の内藤栄氏の宝珠に関する研究⁽⁴⁾によると、平安時代末期から鎌倉時代にかけての醍醐寺では、如意輪観音と宝珠とを同体と見る特別な宝珠信仰が行われていたが、その内容を伝える『東長大事』⁽⁵⁾には興味深い「如意宝珠曼荼羅」が掲載されている(内藤氏前掲論文の図13)。空海に仮託された能作性の宝珠観を图示したものとみられるが、蓮華上五鈷杵に安置される宝珠を雲上の双龍が見上げる図である。さらに『東長大事』には醍醐寺の勝覚(一〇五七―一一二九)が建立した三尊図(同前の図21)を示している。これは中央に五輪塔、左右に不動明王と愛染明王を配したものである。記述によればこの五輪塔の水輪には二顆の宝珠が納められ、「中尊五輪ハ此如意輪ノ三形也」とする。その後勝賢(一一三八―一一九八)はこれを「三仏如意輪法」と称し秘密に伝えた。注目されるのは「塔婆宝珠一鉢異名也」とする記述があることで、これにしたがえば容易に平家納経経篋の意匠が思い浮かぶことになる。五輪塔は如意輪観音であり玉女(皇后・中宮)のイメージと重なり合うであろう。経篋蓋表のモチーフが平安後期の小野流における宝珠信仰を強く意識したものであることは疑いない。清盛がこうした宝珠信仰を知るについては、勝賢が清盛と交誼の深い藤原通憲(信西)(一一〇六―五九)の子息であり、別にはまだ若年だがのちに安徳帝護持僧となる醍醐寺僧良弘(良勝方、一一四二―?)の存在が何らかの役割を果たした可能性も考えられる。

ところで杉橋隆夫氏⁽⁶⁾や、阿部泰郎氏の研究、「大覚寺聖教・文書」⁽⁸⁾や、

田中貴子氏の研究⁽⁹⁾などによれば実際に平安後期から鎌倉初期の醍醐寺ではさまざまな場面で如意宝珠が修法に用いられていた。駄都(舍利・宝珠)への特別な信仰が真言小野流で勃興したのである。すなわち範俊(一〇三八―一一二二)は承暦四年(一〇七七)に如法愛染法、天仁二年(一一〇九)に如法尊勝法を、勝覚は大治二年(一一二七)に如意宝珠法などの宝珠を中心に据えた修法を始修している。降つて勝賢は元暦元年(一一八四)に如法尊勝法を修し、建久二年(一一九一)歳末には後白河院のために如意宝珠法を修したが靈験なく、はやく鳥羽勝光明院宝蔵に宝珠を返還すべきところしばらくの間住房に安置したようであり、『玉葉』建久三年(一一九二)四月八日条によると、兼実は人を遣つてその宝珠を宮中に取り戻している。記事によればもともと如意宝珠は空海が唐より請来したものでこれは室生山精進峯に埋納され、別に大師所造の宝珠は範俊に相伝されさらに白河院に進められ、法勝寺円堂の本尊愛染明王に籠められた。範俊はさらに別に一つの宝珠を白河院に進め、これを相伝した鳥羽院は寵臣である藤原家成に預け、かの没後これを召返して勝光明院宝蔵に安置したとある。かくしてこの勝光明院宝蔵の如意宝珠は古代を通じて王権の象徴として機能した。さて吉田経房は件の宝珠についてきわめて興味深い説を述べている。『吉部秘訓抄』によると、勝賢から宮中への如意宝珠返還時に蔵人權大夫光綱から聞き及んだこととして、この宝珠は白河院が祇園女御にしばらく預けたものであり、唐櫃中の銀篋には宝珠の外に舍利百粒も同梱されていたという事実を明らかにしている⁽¹¹⁾。ここで想起すべきは「仏舍利相承次第」⁽¹²⁾である。

文書「仏舍利相承次第」は、白河院が中国明州・育王山と雁塔山(長安・大慈恩寺)から各一千粒請来した舎利の相伝系図である。冒頭部分は文暦二年(一一三五)には成立していた。白河院の時に小野流(勸修寺流)で勃興した舎利・宝珠(駄都)への特殊な信仰と関連して興味深い。

白河院は没するときその舍利を祇園女御に相伝し、祇園女御はそれを平清盛に渡したという記述が重要である。⁽¹³⁾ 祇園女御は白河院晩年の寵人であったが、『平家物語』が言う清盛の生母ではない。事実はその妹が生母であり、白河院の皇胤をやどしたまま平忠盛（一〇九六―一五三二）に嫁し清盛を生んだが（一一一八年）、清盛三歳の時にわかに没した。祇園女御はこの清盛を猶子として養育した。祖父・正盛、父・忠盛が白河院と同時に祇園女御にも近い関係であったことは事実である。⁽¹⁴⁾

ここで祇園女御の事績を簡単に振り返ると、長治二年（一一〇五）十月二十六日には祇園社の巽（辰巳）に一堂を建立し丈六阿弥陀仏を安置した。供養導師は範俊であり、公卿殿上人女房等美麗過差の人数が参列した。⁽¹⁶⁾ 『源平盛衰記』にその邸宅を祇園社巽とするのと関連があらう。嘉祥元年（一一〇六）七月五日、鳥羽御堂で五日十座の五部大乘経講筵を催した。白河院も参じ、女房等は華麗な様子であった。⁽¹⁷⁾ その後天仁元年（一一〇八）二月十六日に院近臣藤原顕季（一〇五五―一一二二）が建立した仁和寺真乘院で逆修供養をした。⁽¹⁸⁾ また仁和寺に七間堂宇の威徳寺を建立し百牀の大威徳明王像、半丈六像一牀、等身像五十九牀を安置した。⁽¹⁹⁾ 住坊を伴う大規模な結構であった。永久元年（一一一三）十月一日には正盛の六波羅蜜堂にて一切経供養をした。⁽²⁰⁾ 公卿殿上人女房等多数が参じた。大治四年（一一二九）七月十六日、白河院葬儀の際に女房四人の筆頭で素服を給された。⁽²¹⁾ その四十九日である大治四年閏七月二十五日には白河新阿弥陀堂にて仏経の供養を主催する。等身釈迦阿弥陀木像、金泥経一部、色紙経二十部等を供養した。この他香隆寺、本住所三箇所で供養した。⁽²²⁾ 年未詳だが『覚禅抄』千手敬愛法（小野秘事）には、「先跡事白河院御時権僧正範俊被修之 有法験云々 祇園女御奉為院不和之時令修云々」「三形宝珠」などがある。仏事が目立つのが特色である。祇園女御は伝説上の人などではなく白河院晩年に近侍した有力な人物であった

ことが明らかである。猶子には清盛のほかに、待賢門院璋子（一一〇一―四五）、僧禅寛（安芸阿闍梨）、源有仁（一一〇三―四七）らがいた。ところで上記の事績のうち、範俊の名が二度みえるのが注目される。すでにふれたが範俊は白河院に近い小野流の僧である（晩年鳥羽に住し宝珠法を修して白河院を護持）。白河院をめぐって祇園女御と範俊、そして実は正盛も互いに近い関係にあったと推測される。白河院から祇園女御への舍利相伝と如意宝珠相伝には範俊の存在が影響を与え、また祇園女御と正盛とを通じて範俊の宗教的規範が清盛の精神に流れ込んだのだろう。

次には祇園女御の出自に深く関わる祇園社について簡単にふれておく。祇園社の創立には諸説があるが『二十二社註式』には承平五年（九三五）の太政官符を引いて藤原基経建立の観慶寺（字祇園寺、薬師三尊、観音、二王等を安置）に神殿一宇（祇園社）が附属し天神（牛頭天王）、婆利女（婆梨采女）、八王子が祀られており、これが定額寺とされたことを記している。⁽²³⁾ 基経は当地に天神の靈威を感じて居宅を観慶寺としたとい、創建以後はじめ疫神であり後に防疫除災神とされた祇園天神（牛頭天王）が朝野に崇敬された。なお旧観慶寺の木像薬師如来立像（平安中期）と木像十一面観音立像（平安中期）などが伝来する。⁽²⁴⁾ これに先立つ貞観十八年（八七六）十禅師円如が託宣によつて社を建立したと伝える（一説に承平四年（九三四）興福寺僧円如が春日水谷社（龍神）を移して成立した）。

祇園御霊会は白河院の頃から後白河天皇にいたる間にもっとも隆盛したように思われ、大治二年（一一二七）には、白河院、鳥羽院が三条室町の棧敷から見物、⁽²⁵⁾ 大治四年（一一二九）には三院（白河院、鳥羽院、待賢門院）が三条烏丸の棧敷から見物、⁽²⁶⁾ 長承二年（一一三三）には鳥羽院と待賢門院が三条京極殿で見物、⁽²⁷⁾ 治承三年（一一七九）には後白河院が三条室町の棧敷から見物している。⁽²⁸⁾ 御霊会の花は祇園神の三神輿還御であり、

なかでも女神婆梨采女の神輿（少将井神輿）の強い靈威が畏れられた。

婆梨采女神輿の御旅所は少将井であるところから龍神信仰との関係が認められる。なお鎌倉初期の『続古事談』には明らかに祇園社と龍神信仰との関連がうかがわれ、⁽²⁹⁾ 祇園社社家が鎌倉末期に編した『篋篋内伝金鳥玉兎集』所収の「祇園牛頭天王縁起」には、牛頭天王が南海龍宮の娑竭羅龍王女である龍女（婆梨采女）を娶る説話のみえ、婆梨采女と龍女を同視している。⁽³⁰⁾ 祇園神の本地仏は牛頭天王が薬師如来、婆梨采女が十一面観音である。福井・八坂神社には婆梨采女と思われる木像十一面女神坐像（平安後期）が伝来する。⁽³¹⁾ 久安三年（一一四七）六月十五日、清盛は「宿願」のために祇園臨時祭に田楽を奉納している。⁽³²⁾ 祇園鬪諍事件としても知られるが、清盛が祇園社を尊崇したことは事実として認めねばならない。⁽³³⁾ 祇園女御を介して祇園社を深く尊するに至ったのだろう。祇園女御はこうした祇園社に有縁の人であったことに留意すべきである。田中氏の言う「水辺巫女」としての祇園女御の位置が思い浮かぶ。すなわち白河院から宝珠と舍利を相伝された祇園女御は龍女のイメージと重層し「白河院を水界の王たる龍王に宛てれば、その寵を受けた女御姉妹を介して（王）の血統が清盛に流入する」⁽³⁴⁾。かくして祇園女御（あるいは換言すれば清盛の実の母である祇園女御の妹）は宗教的に清盛に強い影響を与えたとはみられないだろうか。清盛の祇園神信仰を通じた龍女信仰の可能性を強調したい。なお周知の如く清盛の信仰については赤松俊秀⁽³⁵⁾氏の研究があり、最近では武笠朗氏の整理された広範な研究があり示唆⁽³⁶⁾にとむ。⁽³⁷⁾

それでは清盛の龍女信仰は平家納経といかに関わるのだろうか。伊都岐島神に注目してみたい。瀬戸内海中央部の厳島に鎮座する伊都岐島神は、航海や漁撈を守護する神として早くから尊崇されたとみられるが、平安初期弘仁二年（八一二）条にはじめて「伊都岐島神」が文献に顕れ、⁽³⁸⁾

ついで貞観元年（八五九）にははじめ伊都岐島神がついで伊都岐島中子天神が、貞観九年（八六七）には伊都岐島宗像小専神が位階を叙せられた。⁽³⁹⁾ 伊都岐島神を海神・龍神である宗像三神の一、女神市杵島姫命と同一視する説もこの頃には萌芽した。⁽⁴⁰⁾ 寛仁元年（一一〇一）には後一条天皇の大奉幣にあずかるほどの有力な存在となる。⁽⁴¹⁾ 清盛は久安二年（一一四六）に安芸守となり保元元年（一一五六）まで在任するが、この間高野山大塔の修理に関わり老僧によって厳島社への奉仕を促されたという。⁽⁴²⁾ 清盛自身は「往年之頃 有一沙門 相語弟子曰 願菩提心之者 祈請此社 必有發得 自聞斯言 偏以信受 帰依本意」と語っている。⁽⁴³⁾ 仁安二年（一一六七）から承安四年（一一七四）の間に厳島社に参詣した藤原成範・澄憲・静賢兄弟は消息を残し、⁽⁴⁴⁾ 亡父信西と厳島内侍との思い出を語るが、そもそも保元四年（一一五九）正月二十一日の内宴（に厳島内侍出仕）を実現させたのは信西と清盛の厳島信仰を介した連携が前提となる。⁽⁴⁶⁾ さて清盛社参は永暦元年（一一六〇）の「年来之宿願」によるものが記録上の初見である。⁽⁴⁷⁾ これに長寛二年の法華経奉獻が次ぐ。以下諸記録に清盛の参詣がみえる。

一方、伊都岐島神は平安中期頃から習合したとされるが、本地仏を明確に観音とするのは長寛二年（一一六四）の清盛願文が初例である。承安元年（一一七一）の「伊都岐島社神宝調進状」には、「御正鉢鏡参面大日 十一面 毘沙門」とある。⁽⁴⁸⁾ この時点では本地仏が三軀並び立っていたかと想像される。建礼門院徳子（一一五五／五七―一一二三）は承安二年（一一七二）に「御唐衣 赤色 羅御裳 腰二色々絲ニテ祝哥を置白色 御扇小松重薄様裏之」などを奉納した。⁽⁴⁹⁾ 徳子が帰依したのは明らかに女神とみられる。承安四年（一一七四）の「建春門院詣厳島願文」⁽⁵⁰⁾は、後白河院・建春門院一行が厳島に詣でたときのもの。厳島を賞して「知龍宮之近苔□ 可以採不死之薬 可以得如意之珠」などと龍宮に擬し、

「廻奉鑄頭大明神本地御正鉢御鏡三面（中略）大日真言百遍 十一面真言百返 毘沙門真言百返」「夫当社者 尋内證者則大日也 有便于祈日域之皇胤 思外現者 亦貴女也 無疑于答女人之丹心」とある。本地仏御正鉢の大日如来・十一面観音・毘沙門天の鏡像を奉獻した。本地仏は内々は大日だが、実際には貴女として現ずると解釈できよう。女人の願いにこたえるという貴女とは十一面観音を言うのであろう。安元三年（一一七七）には高倉天皇が「大日如来像三百六十鉢 十一面観音像三百六十鉢」を摺写し巖島神にすすめた。⁽⁵¹⁾ 治承二年（一一七八）十一月の建礼門院御産時には「等身十一面」が「伊都岐島御正鉢」として供養されている。⁽⁵²⁾ 治承四年（一一八〇）の「高倉院巖島御幸記」には巖島社夜の神事で「あるひはけだかき女房うしろの障子にうつりて、宝殿に向ひ給へる姿を見たるなど申す人もあり」などと、女神の影を想像している。⁽⁵³⁾ 要するに、巖島神本地仏は大日如来と十一面観音が内・外の関係であり現実は女神として意識されていたことが分かる。巖島が龍宮に比されたように、海浜に接して鎮座する女神のイメージは釈迦に宝珠を奉獻する龍女に重層するであろう。実際『愚管抄』は「コノイツクシマト云フハ龍王ノムスメナリト申ツタヘタリ」⁽⁵⁴⁾、『平家物語』巻第二「卒都婆流」では「宮人こたへけるは『是はよな、娑竭羅龍王の第三の姫宮、胎藏界の垂迹なり（胎藏界は胎藏界大日如来の言い）』」⁽⁵⁵⁾としていて。結局、伊都岐島神の本地仏は胎藏界大日如来であるとも信じられていたことが分かる。おそらく胎藏界大日如来と十一面観音が表裏の關係に重ねて理解されていたのではないだろうか。

ところで清盛が勸請した伊都岐島神は六波羅御所の巽角に祀られたのであり、龍神信仰との関わりがここでも想像される。なお清盛が仁安四年（一一六九）以降、福原和田浜や巖島でしばしば法華経千僧供養（千部法華経供養）を主催したのは海神（龍神、龍王）を慰撫し（提婆言⁽⁵⁶⁾）、海の

平安を祈る（普門品）願いによるものとの指摘がある。⁽⁵⁷⁾

清盛の平家納経発願の含意の一つには、自らの龍女（あるいは龍神）信仰をモチーフにして、それを法華経提婆品の龍女信仰に投影しようという強い願いがあつたのではないだろうか。それではここで平家納経のうち、提婆品をあらためて見ることにしたい。

提婆品第十二の表紙は丁子で染め藤黄を引いた料紙に海浜の情景を表している。三方に配される洲浜形は、銀砂子地をほどこしたほぼ同型の紙形を貼付け、その間は銀泥で描いたあらゆる美しい海波でうめつくし、そこに諸色で描いた怪魚を七匹表している。シャチャやエイ、サメなどを想像させる姿だが平安時代の人々が海にいだいたイメージを髣髴させる。これらを海龍族と称してよいかもれない。題簽の瑠璃の深い碧色は「海」を意識したものでだろう。見返絵は、丁子染の料紙に緻密な銀砂子地をほどこし、その上に明るい顔料で「龍女成仏」の図様を表す。上方やや左に寄せて楼閣が虚空に浮かび、空中には楽器や散り蓮華が舞い、その前で説法をする釈迦と圍繞衆を描く。下方には海中からいまでも出現した龍女が、釈迦の前に宝珠を捧げながら進み出たところを表す。海中に住む娑竭羅龍王の八歳になる童女は、修行を積み知恵も感覚もすぐれていたが、自身の持つ三千大千世界の価値があるという宝珠を釈尊に納め、釈尊がそれをすみやかに納めるやいなや、龍女はさらにすみやかに成仏したという。女人成仏へのあこがれが込められている。図では龍女は二人の侍女を引きつれるが、これときわめてちかいかい図様を描くのが平家納経に先行する香川県（重要文化財、松平公益会旧蔵、香川県歴史博物館現蔵）の紫紙銀地彩色見返絵法華経で、⁽⁵⁸⁾ その巻五には唐服を着し宝珠を捧持する龍女が、翳をかかげた侍女を引きつれて出現する図様が見える。天衣を長く引いているところに平家納経と近似感がある。なお釈迦の楼閣の大棟の中央部に、金泥で描かれた大きい宝珠が見えるのが注

意される。この宝珠は五輪塔と同一であるとして、胎藏界大日如来（三昧耶形は五輪塔）を含意するとみることも可能であろう。かくして同時に平家納経経篋蓋表の図様も、胎藏界大日如来に重層するであろう。だとすると経篋は一面で法身仏（胎藏界大日如来＝五輪塔）と法舍利（法華経）の同体を表し、それを連絡する（法舍利を法身仏にもたらし）のが龍王（龍女）であることになる。なお提婆品経巻軸端には水晶五輪塔をつけていることも看過できない。龍女・宝珠・龍神に関わる平氏の特別な信仰の反映が推測されることを重ねて指摘しておきたい。長寛二年（一一六四）時には徳子は八歳か十歳である。⁵⁹もし八歳であれば姿謁羅龍王の娘と同じ年齢となる。すなわち徳子が龍女に見立てられた可能性が想像されよう。

三 一品経供養、源氏供養と見返絵

さてここで視点を変えて平家納経中の物語絵様の図様について考えてみたい。平家納経の物語絵様の見返絵をはじめ、他の同様の見返絵の成立についてかつて考察したことがある。平安後期の法華経一品経供養に添えて作られた和歌、すなわち結縁一品経和歌の成立が物語絵様の一品経見返絵の成立に深く関わっていることを示したのである。物語絵様見返絵は、法会にともなって詠われることとなった一品経和歌という、経説をいったん離れた新たなテキストを介在させて成立・絵画化されたとする可能性を考えた。この場合には平安中期頃からきわめて盛んになったとされる歌合において、歌が絵に描かれたことが参考になる。法華経見返絵の場合は、テキスト（一品経和歌）が経説をいったん離れることによって、格段に自由なモチーフを獲得することが可能になったと考えたのである。⁶⁰

一品経和歌の近似例（結縁経和歌といえる）ではあるが、源俊頼の『散木奇歌集』に記される事例に、法文歌（和歌）と見返絵制作の緊密な関係を描いたことがある。『散木奇歌集』に、

いみの程に結縁経供養しけるに 四卷をあたりたりけるに

身づから書て表紙に服なる男のなきたるを書きて あまの

むかひたるに經の文字より光をさ、せて尼の頂にかけたる

かたはらに あしでにてかける歌

君こふる 涙の瀧に おぼほれて ふりさけさけぶ 聲はきこゆやとある。すでに別稿で言及したようにこれは寛治六年（一〇九二）に亡くなった、俊頼の母の追善のための結縁経の際の歌であり、俊頼は『法華経』の巻四に結縁し自ら書写したが、その見返絵には喪服の男と尼とを表し、経文からその尼に光が一条射すさまを描いたと解釈することができる。すなわち見返絵は俊頼の母が亡くなったという事件に重ね合わせて、法華経巻四の法師品に説かれる、法華経受持の比丘尼の成仏を表すものと考えられる。俊頼は結縁経を書写した際に、経意を表現したとみられる見返絵―ただし経意を表現するのに、比丘尼として母である出家せる尼上を配した―を描き、供養したことがわかる。俊頼のこの作善は記念すべき出来ごとである。これより以降、実際に物語絵様見返絵の作例が現存するようになることは周知である。

一方、時代が降った平安末期（おそらく治承年間）の事例に「源氏供養」と称される一品経供養がある。「源氏供養」とは国文学研究の世界ではすでに戦前に注目された話題であって、その後の研究史が参考になる。⁶¹紫式部が虚言をもって『源氏物語』を作ったがゆえに地獄に堕ちて苦しんだが、それを「歌読共集テ」和歌を詠じ一品経書写を催し供養するというものである。⁶²主催したのは藤原親忠女であり、はじめ藤原為経（寂超）の妻となり後に俊成の妻となった美福門院加賀の名で知られる老尼

である。供養導師は澄憲(一一二六―一二〇三)⁽⁶³⁾である。その澄憲の表白によれば「信心大施主禪定比丘尼」が発願し「殊勸道俗貴賤 書写法華二十八品之真文 卷々端図源氏之一篇 蓋軫煩惱為菩提也 経品々即宛物語篇目」などとあつて、一品経の見返絵に『源氏物語』の一場面が描かれたことが明らかに知られて、きわめて興味深い。「信心大施主禪定比丘尼」を安元二年(一一七六)頃、夫である俊成に次いで出家した親忠女とされたのは後藤丹治氏であつて、以下の二首の一品経和歌をこの源氏供養の時のものとされた。すなわち一首は藤原宗家の歌であり、他は藤原隆信の詠歌である。宗家は、

紫式部のためとて結縁供養し侍りける所に 菓草喩品を送り侍る
とて 権大納言宗家

法の雨に 我もやぬれむ むつまじき 若むらさきの 草のゆかりに
と詠じ、隆信は、

ははの紫式部がれうに一品経せられしにたらに品をとりて

夢のうちに まもるちかひのしるしあらは なかきねふりを さま
せとそおもふ

と詠っている⁽⁶⁵⁾。なお隆信は親忠女の前夫寂超の息であり、宗家は俊成との間の女である八条院按察の夫である。親忠女を中心とし、縁のある者を集めて供養されたことと推測される。久保田淳氏は「全くの想像が許されるならば、親忠女が施主となって紫式部のため一品経供養、いわゆる源氏供養には、夫俊成を始め、彼女所生の娘達、宗家や家通等その夫達、そして前夫との間の子である隆信、夫の猶子定長(寂蓮)、親忠女に連なる勝命、娘達の宮仕え先である前斎院式子内親王や八条院・高松院・上西門院などの女院の同輩の女房達が参加した、極めて女性色の濃厚な文学行事だったのではないであろうか。少なくとも、八条院三条(俊成卿女の母)・高松院新大納言・上西門院五条・八条院按察・八条

院中納言・前斎院大納言など、親忠女を母とする俊成の娘達が加わっていた可能性は相当大であると思われる。」と主張される⁽⁶⁶⁾。ともかくもそうした源氏供養が催されたのだが、現存の一品経和歌から知られるように、宗家が菓草喩品第五を担当し、隆信は陀羅尼品第二十六を詠い描いたであろう。ところでこの宗家の歌は菓草喩品の三草二木のたとえを「若紫の草のゆかり」と詠つて『源氏物語』「若紫」巻との関係を予想させ、一方、隆信の歌は「夢のうちに」とあるがこれは陀羅尼品の「乃至夢中 亦復莫惱」にしたがっている。「長き眠り」とあるがこの句と『源氏物語』との関わりは今ひとつ明確とは言えない。

院政期には『源氏物語』の巻名を詠じたいわゆる源氏物語巻名和歌が散見するようになる。『長秋詠藻』『千載集』『清輔朝臣集』『頼政朝臣集』『忠度朝臣集』『経正朝臣集』『実家卿集』『小侍従集』『明日香井和歌集』『信生法師集』などにみられるという⁽⁶⁷⁾が、院政後期の『源氏物語』理解を背景に次第に盛んとなった。上記の歌集のうち、「寄源氏恋」と題書きのあるものは、俊恵法師の歌林苑で行われた月例歌会で詠じられたものと推測されている。清輔、忠度、経正、小侍従の歌は同じ機会に詠じられたものであり、同一の巻名を用いていない。このうちに平忠度と、平経正の名があるのが注意される。両名ともに藤原俊成と近い関係にあり師事したと思われる。平氏の人々の名が『源氏物語』との関わりで見えるのは注意しておいてよい。また忠度の父である忠盛が、白河院・鳥羽院に仕え重用されたことは周知である。平氏全盛の基礎を築く一方、文雅の才をもちあわせもち家集『忠盛集』を遺している。藤原為忠(寂超の父)とは和歌を通じて親しくその女を妻ともした。『金葉集』等の勅撰集に十七首入る。『忠盛集』の一首、

あき はばきよりのほりておはしましけるに 殿上人あかしの月
はいかがととひければ

ありあけの月もあかしのうらかぜになみばかりこそよると見えしかは、『源氏物語』の「明石巻」にかけているかとも想われ、忠盛のなみなみならぬ教養がにじむ。⁽⁶⁸⁾

さて再度源氏供養に注目すれば、一品経書写と一品経和歌、それに源氏物語絵が三者一体となり制作・供養されていることがわかる。その前提として見返絵の側では、例えば源俊頼の事例や久能寺経や平家納経のような物語絵様彩色見返絵の出現・展開があり、そこに『源氏物語』がモチーフとして採用されるに際しては、上記のような源氏研究を基盤にしたと思われる源氏物語巻名和歌の成立が必要であったのだろう。

それでは源氏供養では、法華経二十八品各章と『源氏物語』五十四帖はどのように対応したのだろうか。推測を重ねることになるが敢えて考えたい。さきの宗家の歌はおそらくまず探題により薬草喩品をとった。歌の内容からは「若紫巻」との関連が考えられる。隆信は陀羅尼品をとったが対応する一品経は不詳である。かつて寺本氏はその対応について藤原伊行の『源氏釈』にみえる「並の巻」の概念を引き合いに出して一考されているのでその説にしたがうと次表のような対応関係が考えられる。⁽⁶⁹⁾

一 桐壺	序品第一
二 帚木（並一空蟬、二夕顔）	方便品第二
三 若紫（並末摘花）	譬喩品第三
四 紅葉賀	信解品第四
五 花宴	薬草喩品第五
六 葵	授記品第六
七 榊	化城喩品第七
八 花散里	五百弟子受記品第八
九 須磨	人記品第九

十 明石	法師品第十
十一 濔標（並蓬生、二関屋）	宝塔品第十一
十二 絵合	提婆品第十二
十三 松風	勸持品第十三
十四 薄雲	安樂行品第十四
十五 朝顔	涌出品第十五
十六 乙女	寿量品第十六
十七 玉鬘（並初音、二胡蝶、三螢、四常夏、五篝火、六野分、七御幸、八藤袴、九真木柱）	分別功德本第十七
十八 梅枝	随喜功德品第十八
十九 藤裏葉	法師功德品第十九
二十 若菜	常不輕品第二十
二十一 柏木	神力品第二十一
二十二 横笛（並鈴虫）	囑累本第二十二
二十三 夕霧	薬王品第二十三
二十四 御法	妙音品第二十四
二十五 幻	普門品第二十五
二十六 雲隱	陀羅尼品第二十六
二十七 匂兵部卿（並一紅梅、二竹河）	嚴王品第二十七
二十八 宇治十帖（一橋姫、二椎本、三角總、四さわらび、五宿木、六東屋、七浮舟、八かげろふ、九手習、十夢の浮橋）	勸発品第二十八

『源氏物語』五十四帖を並の巻を考慮に入れて順序立て、さらに題名のみ伝来したという「雲隠巻」を加え、宇治十帖は全体で一つに数えるという整理である。必ずしも整合性のある整理ではないことは例えば源氏「若紫巻」と法華経薬草喩品が対応していない点からも考えられよう。

若紫巻を例外とみてしばらく置けば陀羅尼品二十六は「雲隠巻」に対応することになる。「雲隠巻」は光源氏が没する物語とされるので隆信の「長き眠り」に対応するように思われる。伊行の『源氏釈』が源氏供養に引用されたことは十分に考えられることである。

四 平家納経見返絵のモチーフ

紙数を費やしたがこの源氏供養の方法の、いわば部分的先行例が平家納経ではないかというのが私の推測である。平家納経の物語絵様彩色見返絵の一部を、『源氏物語』に取材した図様とみるのである。すなわち序品第一（奥書なし）は「桐壺巻」、勸持品第十三（奥書なし）は「松風巻」、分別功德品第十七（署名「左衛門少尉平盛國」）は「初音巻」、法師功德品第十九（署名「長寛二年九月一日 従二位行權中納言平朝臣清盛」）は「藤裏葉巻」、嚴王品第二十七（署名「長寛二年六月二日 右兵衛尉平朝臣重康」）は「匂兵部卿巻」とみるのである（法師功德品見返絵は普賢来儀図であるが、若手を交えた大和絵様の表現であるので一連のグループとした）。薬王品第二十三（署名「左衛門少尉平盛信」）はいまのところ『源氏物語』との関係をみつけない。またこれらは平家納経の署名をとともなう巻に偏っており、あるいは序品（最終紙長九・九cm）と勸持品（最終紙七・六cm）は経巻最終紙が極端に短いことから、もとあつた署名が切り離され佚失したものではないかとも考えられる。物語絵様彩色見返絵はやはり何か意味を持つ一連のものと考えざるを得ない。

法師功德品第十九の場合、丁子であわく黄色に染めた料紙に金截箔や銀禾を蒔いた上に、金泥と銀泥を基調にしたコントラストの少ない描写で持経者の目前に影向する普賢菩薩を表している。この普賢菩薩は背景の中にかすかにかたちが見えるというきわめて幻想的な表現であり注

目されてきた。普賢菩薩を金泥（あるいは採み箔か）で彩色し、わずかに白線で肉身線を描きこし、表情を点彩で表すのは、勸持品の如来形の表現法に近い。いわば皆金色に表された仏の姿は、鎌倉時代に先行する新しい表現法でもある。なお図中の土坡には墨線を引き重ねて皴を表しているが、これも勸持品にみられるところであり、共通性が注目される。

ただこの普賢来儀図の図様は、法華経終章の勸発品第二十八かあるいは結経である観普賢経の経説にしたがって描かれる、法華経信仰者にとつて至高の場面である。したがって、当巻見返絵は勸発品か観普賢経との錯簡を疑われたことさえあつた。しかしよく観察すると表紙・見返絵の装飾と本文料紙の装飾が近似であり（違和感がなく）、さらに現状の題名を失った金属製の題簽からのぞき見られる表紙料紙には、当初と思われる白字の古様の筆跡（本文写経の首・尾題と同筆）で、「法師功德品」と明確に経題を書してあることから錯簡の疑いはない。それでは、なぜここに取えてこの図様が描かれたのだろうか。それは法師功德品が『源氏物語』にあてられれば「藤裏葉巻」に対応し、「藤裏葉巻」では光源氏の唯一人の女である明石の姫君が東宮に無事入内を果たすこと（明石の姫君は中宮となり若宮を産み、その若宮は後に東宮となる）、光源氏が准太上天皇となり一代の栄華を極めるところであること、などが清盛の願望に合致したであろうことが考えられる。光源氏が桐壺帝の皇子でありながら臣下の身分となつた身上と、清盛が実は白河院の皇胤であるという出生の事情とは類似している。院政後期、源氏研究が隆盛となる中で清盛は自らの身上を光源氏に重ね合わせたのではないだろうか。普賢の来儀にあずかる山中修行僧は清盛自身ということになる。周知のように、巻末には清盛自身の署名がある。

なおこの見返絵には誦経する行者の窟の上、金泥で描かれた松樹に重ねて、また下辺の岩形に、さらに普賢菩薩が影向する洲浜の上に、緑（緑

青)や墨で「しつかに」「山林無」「ひと利る天」「数道」、(絵で普賢菩薩)「身え給へ」などと文字が隠されている。かつて亀田孜氏は、『梁塵秘抄』巻第二「法華經二十八品歌、普賢品」の今様に擬して、「山林 静かに独り居て 修道法師の前にこそ 普賢菩薩は見え給へ」と詠まれた(亀田氏自作今様歌)。この見返絵がこうした今様を踏まえているという立論である。以下、私に付け加えるならば、同じ『梁塵秘抄』『法華經二十八品歌』の「法師品(第十)」には、「寂寞音せぬ山寺に 法華經誦して 僧ゐたり 普賢頭を撫でたまひ 釈迦は常に身を護る」「静かに音せぬ道場に・・・」「法華は諸法にすぐれたり 人の音せぬ所にて 誦誦つればおのづから 普賢薩埵は見えたまふ」などの法華經誦の功德を詠う今様があり、これは法師品の釈迦の偈「寂寞無人聲 讀誦此經典 我爾時爲現 清淨光明身」によるものである。法師品では説法をするのは普賢菩薩ではなく釈迦であるが、当時の人はこれを普賢に読み替えたと思しい。とすればこの法師功德品の見返絵の図様は、実は今様に詠われるように法師品の図様である可能性も同時に考えなければならぬ。すなわちこの法師功德品見返絵は法師品を源泉としており、法師品を介して『源氏物語』『明石巻』に重奏する可能性をも考えなければならぬのではないだろうか。

序品第一は「桐壺巻」にあたる。この見返絵には貴顕男女の法華經書写・誦の功德が描かれている。経文から一条の截金線で表された光が高貴な女性のあたりにふりかかるようだ。序品には釈迦が説法に先立って眉間白毫相から光を放ち、六道衆生やあまたの仏国土の情景を、説法に参じた会衆に示したという場面がある。この見返絵はその釈迦の光が人道に至ったところとも解される。しかしここでは『源氏物語』に引き寄せて、桐壺更衣の受胎(すなわち光源氏を身籠る)を暗示する場面と考えることも可能であろう。桐壺更衣は後に言及する明石の入道のいと

こでもある。

ついで勸持品第十三と分別功德品第十七はそれぞれ「松風巻」と「初音巻」にあたるとしたらどうだろうか。勸持品には山中の小庵に安置された阿弥陀如来像を礼拝供養する尼公と女房を表している。庭先には懸樋から流れる水流が描かれ、いかにも鄙びた風情。これは山里における仏像礼拝供養を勸持品中の経意に重ねて表現したものと考えてきた。序品と同様に現世の信仰生活になぞらえて法華經の経意を表現したと一応解される。勸持品で釈迦の姨母の摩訶波闍提比丘尼と妃であった耶輸陀羅比丘尼の二人の女性に初めて授記したことを述べるのに対応し、老尼は前者、尼削ぎの女性を後者とみるのである。一方『源氏物語』に引き寄せて解釈すれば、「松風巻」に光源氏が明石の上とその老母(尼)、それに明石の上との間にもうけた女である姫君を大堰山荘に呼び寄せくらさせたところと見る。『源氏物語』によれば、大堰山荘は遣水を流し関伽棚などもそなえていたという。

この勸持品と同一の描き手によって描かれたとみられるのが分別功德品である。ここでは蓮池を前にして洲浜に老尼(銀泥隈取の着衣)、高貴な女性(同じ銀泥隈取の着衣)、小桂(丹地に金泥斜格子文の着衣)姿の女性、直衣(銀地を透かす群青四菱入り三重襷文)と指貫(白群地に銀泥の浮線綾文)姿の高貴な男性がくつろいだ様子で配される。奥に坐す二人の女性は勸持品をひくものかと推測され、これを明石の上とその老母と考え、手前の女性を八歳に成長した明石の姫君、男性を光源氏とみたい。しかし蓮池を前にした夏の情景であるのが物語に合わず、また「初音巻」では明石の姫君は未だ紫の上のもとにいるので、物語とは完全に一致する図様であるとは言えないが、可能性に留意してさらに後考を重ねたい。

嚴王品第二十七は、経説に説かれる妙莊嚴王の二王子である淨藏・淨

厳に見立てたと思われる二人の高貴な女性を描いている。見返絵はいかにも歌絵風であり、添景である甕(亀)、水に浮かぶ経卷(浮き木)、扇など当時の人が見ればただちに解しうるだろう絵模様が配されている。また葦手にも特色がある。前出の『梁塵秘抄』『妙莊嚴王品』には「釈迦の御法は浮木なり 参り会ふ我等は亀なれや 今は当来彌勒の 三会の暁疑わず」とある。これは厳王品長行の「佛難得値 如優曇波羅華 又如一眼之龜 值浮木孔」に対応しているが、この今様にも近い図様と思われる。「匂兵部卿卷」では光源氏亡きあとの声望を継ぐ人として、当今の三宮(匂宮は、当今と明石の中宮の三男)と薫(光源氏の次男、実は柏木の子)の評判が高い。匂宮は二条院を里邸としているが、明石の中宮の女一の宮は光源氏が築いた六条院に住み、次期東宮候補である二の宮は夕霧(光源氏の男)の次女中の君を娶って六条院を里邸にしている。また夕霧の長女大君は東宮妃となる。明石の中宮と当今の間の二人の男子はそれぞれ夕霧の大君・中の君を娶ったことになるが、明石の御方(明石の上)は大勢の親王たちの後見役で幸せであった。厳王品の見返絵に描かれる二人の高貴な女性とは、東宮妃となった大君と二の宮に嫁した中の君を表したのではないだろうか。大君と中の君の姉妹を、淨蔵・淨蔵の兄弟にかけたことになる。

仮説を重ねてきたが、平家納経は藤原親忠女が主催した源氏供養に先行して、部分的にはあるが源氏物語絵を見返絵に採用したのではないか。その関係付けの仕方は源氏絵を法華経にかけるという方法である。ここまで考察して次第に明らかとなるように、上記見返絵に描かれる主題の裏に隠されているのは、『源氏物語』に語られる明石一族と光源氏の物語ではないかと想像される。平家納経の編纂が計画されたおりに、明石一族の物語を織り込むことが意図されたのではないだろうかという

のが私の次の推測である。その理由は那邊にあるのか。次には『源氏物語』の中の明石一族の持つ意味を考えなければならぬ。

五 明石一族の物語

『源氏物語』における明石一族の物語には、注目すべき特徴がある。明石一族は、光源氏がいったん隠棲した須磨から、ふたたび京に帰り栄華あふれる生活にたちもどる契機をなした重要な位置づけの人々である。明石一族の属性には、はじめから何か神秘的な力が付与されていることにも注目しなければならない。

『源氏物語』の「若紫卷」では、良清が明石一族のうわさをする場面があり、明石の入道が自分の幼い女(明石の上)に対して、「宿世たがはば海に入りね」と、常に遺言していることをうけて、人々が「海龍王の后になるべきいき女なり」と言い合った、というところがある。明石の上は、「海」に強く縁づけられ、また同時に海中に住む「海龍王」にもかかわる人物ということになる。もともと明石の入道はこの女が生まれるときには、異常な瑞夢を見、住吉明神に祈って女を帝が高貴な人に娶せようとしたという(「若菜上卷」)。明石の入道や明石の上の住吉明神に対する信仰は深く、『源氏物語』のいたるところで言及されているが、(入道)「住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童のいときなうはべりしより思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとにかならずかの御社に参ることなむはべる」(「明石卷」)、(明石の上)「思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける。父君、ところせく思ひかしづきて、年に二たび住吉に詣でさせけり。」(「須磨卷」)などとある。⁽⁷⁰⁾明石一族は、住吉の神に深く帰依していたが、住吉の神とは海神であり、明石一族はその海神に連なるべ

き海龍王の一族であるとの暗喩的構造が見てとれよう。⁽⁷¹⁾

ところで『源氏物語』『須磨卷』には光源氏が須磨に隠棲したときの「弥生の朔日に出で来たる巳の日」(三月一日の巳の日)の祓えについて興味深い記述がある。光源氏が三月上巳の日に禊ぎをしようとして海辺に出て、陰陽師を召して祓えをさせたところ、にわかにも暴風雨が起り高潮も襲来し落雷もあつて異様なこととなり、光源氏にも危険が及ぶほどであった。これは海の中の龍王が光源氏を見込んで神威を示したのである(海龍王のもので)。この風雨は数週間やまず、ついに光源氏は住吉明神や、海の中の龍王、よろづの神たちに祈り、この災禍を乗りこえようとする。この光源氏の危機を救い、夢枕にたつた父帝桐壺院のお告げにしたがおうとする光源氏を、実際に須磨から明石に導いたのは明石の入道である。明石の入道は同じ月十三日(巳の日)に、神慮により「あやしき風細う吹」きたるにのり小舟で須磨にいたり、源氏を明石に連れ帰るのである。この須磨での事件のキーワードは、「住吉明神」、「龍王」、暦日の「巳」であろう。いずれも海や龍神の信仰にかかわることが注意される。

実際、石川徹氏は光源氏の須磨流謫譚は『日本書紀』の海幸山幸説話を典拠(原話)にしており、彦火々出見命が光源氏、龍宮の豊玉姫(彦火々出見命と結婚する)が明石の上に投影されるとされる。⁽⁷²⁾明石の上はすでに「若紫卷」で「海龍王の后になるべきいつき女」とされていることは指摘しておいた。

さらに光源氏と明石の上の間に生まれた、明石の姫君を「夜光る玉」に擬し、海幸山幸説話の潮満つ玉・潮干る玉にみだてていることにも注意される。すなわち『源氏物語』『松風卷』に「若君は、いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉の心地して、袖より外には放ちきこえざりつるを」などとある。なお、この夜光玉とは『源氏物語』の古注によれば

海龍王の子(女)の持物である。⁽⁷³⁾すなわち明石の上とその光源氏との間の女の明石の姫君とは、海龍王の一族として何重にも性格付けがなされているのである。『源氏物語』の明石一族が、海龍王の一族になぞらえられ、重層的構造をなすことは、確実である。

なお、『源氏物語』にはさらに重ねて、光源氏とこの明石一族との関係が言及されているところがある。それは明石入道が語る「故母御息所は、おのがをじにもおのしたまひし按察大納言の御むすめなり」(『須磨卷』)という事実である。光源氏の母である桐壺更衣は、明石入道の叔父の按察大納言の女という。すなわち明石の入道と光源氏の母とはいとの関係にあたる。したがって光源氏にも母方を通じて、海龍王の性格が付与されていることになる。おそらくこの事実が、『源氏物語』『須磨卷』における光源氏の異常な体験の伏線になるのである。すなわち光源氏も海龍王とは無関係ではないのである。⁽⁷⁴⁾

その後、光源氏はふたたび帰洛することになる。重要なのは光源氏と明石一族の血を引く明石の姫君は、光源氏の唯一の女であり、彼女はその後東宮の妃となり、次代の天皇になるべき人を生むことである。かくして光源氏の血は皇統に流れ込むことになる。

以上要するに、『源氏物語』における明石一族は、性格的には海龍王の一族が現世に現れたものであり、光源氏はその一族によって、皇統に自らの血を伝えることができたと解されるのが注意される。

平清盛が着目したのは、『源氏物語』におけるこの明石一族と光源氏との関係であると考えられる。『源氏物語』には海神、龍神、龍王にかかわる神道的(民俗信仰的)なものとして宗教的なものをあわせて、さまざまな奇跡奇瑞の物語がちりばめられている。清盛は、みずからの龍神(龍女)信仰をその接点として、明石一族の物語に着目したのではないだろうか。清盛にとつては、自らの栄達と、その女である徳子を入内させついは

次代の天皇の外戚となることこそが、願望であったのではないだろうか。『源氏物語』の明石一族の物語と清盛の願望とを重ね合わせてみることは可能であると考へたい。また「藤裏葉巻」が、光源氏が官位をきわめるところであり、明石の姫君が入内をはたす場面でもあることにもふたたび注意すべきである。清盛の龍神（龍女）信仰こそが、平家納経と『源氏物語』との接点であると考へられ、その故にこそ『源氏物語』のうちの明石一族の物語が注目されたものと考えたい。

六 清盛・平氏周辺と『源氏物語』

ところで、上記の前提となるべき、清盛やその周辺の『源氏物語』理解はどのようにしてつちかわれたものだろうか。そのために、平氏をとりまく文化的背景について若干の推察をこころみたい。

いくつかの指標をあげれば、まず堀川院のころ（十二世紀初頭）からの源氏流行があげられる。⁽⁷⁵⁾ また現存の徳川黎明会と五島美術館の源氏物語絵巻は、十二世紀前半ころの作品である。さらに文献によれば、白河院政、鳥羽天皇のころに源氏物語絵巻が制作された。⁽⁷⁶⁾ このときには、鳥羽天皇の中宮である待賢門院が、中将君（三位中将源有仁）に源氏絵間紙（源氏絵の料紙と解される）を調進させた。この有仁（一一〇三―四七）は、左大臣、従一位に至った人物で、後三条天皇の皇子輔仁親王の子である。元永二年（一一一九）に父輔仁親王が没したのち源姓を賜り従三位に叙せられた。祇園女御の猶子（白河天皇の養子）でもあった。

またこれと同じころ、二十巻本の源氏物語絵巻も制作された。なおこの源氏物語絵巻の画家は、「紀の局」と「長門の局」である。このうち、紀の局は清盛の同盟者である藤原通憲（信西）の妻であった藤原朝子である可能性が高い（朝子は「紀禪尼」として実際に画家として目無経白描

下絵を遺している）。この二十巻本源氏物語絵巻については建礼門院徳子の女院御所に架蔵されている。⁽⁷⁷⁾ この間の事情については秋山光和氏や徳川義宣氏の緒論がある。⁽⁷⁸⁾

その建礼門院に仕えた建礼門院右京大夫は、『源氏釈』を著した藤原伊行の女であつて、『建礼門院右京大夫集』にみる彼女の和歌には、『源氏物語』をふまえたものが多い。なお、建礼門院右京大夫の手元には、『源氏物語』の一本が伝えられていた。⁽⁷⁹⁾ 糸賀きみ江氏によれば、女房・右京大夫はこれより先、永万二年（一一六六）には、平清盛の女である盛子が嫁した藤原基実（一一四三―六六）に出仕していたと推測される。⁽⁸⁰⁾ 女房・右京大夫が平氏の周辺において活躍したのは意外に早いだろう。女房・右京大夫は基実の没後、盛子の縁で、その妹である建礼門院に仕えたと推測される。

左大臣・摂政であつた基実は、そのころ大納言であつた清盛の支えを受けて若年ながら政治の主導権を握っていたとみなされる。この藤原基実の後見が藤原忠通の代から摂関家に仕えていた藤原邦綱（一一二一―一一八二）であり、邦綱は基実の没後、その遺領（摂関家領）を盛子に伝えるように清盛に進言し、自らも鳥津荘を知行した。邦綱は摂関家を通じて、盛子が基実に嫁した長寛二年（一一六四）二月にはすでに清盛にきわめて近しく、またその後も深い関係を保つ。邦綱は右馬権助藤原盛国の子で、紫式部の父、為時の五代の孫であり、平清盛の親友である。⁽⁸¹⁾ 春宮権大夫、右京大夫、周防権守などを歴任している。男に清盛の養子とした清邦がいた。女には、成子（六条天皇乳母）、邦子（高倉天皇乳母）、輔子（安徳天皇乳母、平重衡室）、綱子（建礼門院乳母）らがいた。もつて清盛との強いつながりがうかがわれよう。「平大相国とさしも契深う、心ざし浅からざりし人なり」（『平家物語』六）といわれた。清盛はこの邦綱の父の盛国の邸宅で養和元年（一一八一）閏二月四日没してい

る。邦綱もそのあとを追うように、同二十三日に没した。すなわち清盛は、紫式部と縁続きの人を友人とした。

邦綱の事績のうちで注目すべき事の一つに、仁安元年（一一六六）九月三日・六日の、基実没後の法事に際しておこなった結縁経供養がある。『兵範記』によれば、

九月三日（略）次有結縁経供養

二幅釋迦三尊一鋪 錦縁 信範奉圖 廿八品開結二經 阿彌陀

般 若心經等 都三十二軸 三位左京兆（左京大夫） 左大丞 刑部卿重家朝

臣以下三十二人 各爲所課 併書寫一卷 裝潢鏤金銀 寶物珠玉

互致美麗 是深志之至也 桓救阿闍梨爲導師 蓋依能説也 願文

式部權少輔敦綱草之 宮内少輔伊行清書之 紫裏白色紙 金薄

九月六日（略）有右京大夫御仏事（略）次女房一品經供養 母儀二

位殿 六波羅三位殿 此官旨殿以下 兩方女房各分一品 調一軸

金銀珠玉 美麗究善 被副捧物 是又銀造物 若枝葉錦横被 或

織物掛 珍重之至 不能筆端

普賢一鋪 一幅半錦縁 被物一重 御誦經布十段 佛布施 造花

佛供 御明

などとあつて、九月三日および六日には、故撰政藤原基実のための一品経供養が行われたが、それは男方と女方にわけて供養され、あわせて六十四巻の法華経一品経などの経巻が制作された。それぞれの経巻は裝潢に金銀珠玉が用いられ美麗をきわめ、鳥羽院政期待賢門院などの作善を連想させる。この男方には、藤原邦綱が筆頭として関わり、また女房一品経供養にも同様に邦綱が関わり、その女方には基実の母である従二位信子、六波羅三位平時子が参加していることも知られる。

ここで、男方の供養願文（おそらく女方の願文も同様）を藤原伊行が書していることが注目される。伊行は同じ九月七日の仏事の願文をも清書

している⁽⁸²⁾。すなわち藤原伊行は、この基実家にきわめて近しかった。さかのほれば、伊行は関白基実の初度の上表文（藤原永範起草）を世尊寺流の能書として清書している⁽⁸³⁾。また基実が左大臣を辞するときの上表も清書している⁽⁸⁴⁾。これより先、久寿二年（一一五五）には、基実の父忠通が亡くなった夫人のために行つた仏事の願文を書いている⁽⁸⁵⁾。さらに伊行は邦綱とも近しかったと考えられる。伊行が源氏物語研究にしたがつたのは、紫式部有縁の邦綱の存在も無関係ではないのだろう。

かくして、伊行父子はかなり早い時期から邦綱・基実を介して清盛や平氏に近いところで活躍したことが推測される。またその後、伊行は、仁安二年（一一六七）の「太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合」に出仕して、四首を遺した事実も確認される。この平経盛が主催した歌合は、王朝のなごりを伝えるものであり、久保田淳氏は、「そのような平家全盛時代の『源氏』熱―結局それは『源氏』を頂点とする王朝文化への憧憬に他ならない―（中略）彼等は『源氏』を、彼等の時代にはもはや顔落した形でしか残り留まっていけない王朝の美学を測定する最も確かな尺度とみなしていた。」とされ、平氏政権下の文化における『源氏物語』の重要な位置づけについて述べておられる⁽⁸⁶⁾。平氏と平氏をとりまく人々がさまざまな形で『源氏物語』と関わっていることが理解できる。

こうした平氏を取りまく文化的状況の中で、最も注目されるのが、藤原伊行の存在である。伊行の年齢については普通には安元元年（一一七五）に三十八歳で没した（生年は一一三八年となる）⁽⁸⁷⁾とされるが、白畑よし氏には年齢をやや上げる独自の解釈がある⁽⁸⁸⁾。伊行が葦手本倭漢朗詠抄二巻（国宝、京都国立博物館所蔵）をあらわした永暦元年（一一六〇）は伊行四十五歳（生年は一一一六年となる）、その女で、後に建礼門院右京大夫となる人は八歳であるとされる。糸賀氏の年齢観とも近い。伊行の活躍年がより自然に理解できよう。伊行が『源氏釈』を著したのは、積

極的に、上記のような平氏政権下における文化状況の要請にしたがったのであろうと解したい。⁽⁸⁹⁾

平氏をとりまく『源氏物語』理解の状況は概略以上のようなものであり、しだいに重要な人間関係が浮彫りになる。ただし平清盛と『源氏物語』の直接的な接点を示す具体的な証拠は見つけ出せないとせざるを得ないが、しかし、ここで注目されるのは、藤原伊行と平家納経との関わりが推測されることである。

七 藤原伊行と平家納経

藤原伊行は、藤原行成に発する世尊寺流の六代孫であり、能書として知られている。基実のほかに藤原貴族のために達筆をふるっていることが記録から知られる。⁽⁹⁰⁾伊行の筆跡のうち、幸いにも葦手本倭漢朗詠抄二巻が今日にまで伝わっていて、我々はそこから興味ある事実をうかがうことができる。

かつて田中塊堂氏はこの伊行筆倭漢朗詠抄と、平家納経願文とを同筆とみられた。⁽⁹¹⁾平家納経を詳細にみれば、たとえば方便品第二の見返絵は、この葦手本倭漢朗詠抄と一見して近い関係にあることが推測される。

そこで、その方便品に注目することにする。方便品第二の表紙には、他の巻と同様に銀製鍍金の発装金具が取り付けられている。その表紙側は細い竹幹に竹葉を五枝透彫りし、竹葉には鍍金をほどこしている。見返絵側は端装から二本の小枝をのばし、刻線で竹葉を表している。なお、掛緒を留める鑲も竹の小枝に象るといふきわめて凝ったものである。

「竹」はこの時代には比較的めずらしい図様とみられるが、方便品に「葦や竹が密生する如く多くの優れた求道者がそろって智慧を追求しても、仏の智慧には及ばない」(「如稻麻竹葦 充滿十方刹 一心以妙智

於恆河沙劫 咸皆共思量 不能知佛智」と説くところに着目したのだろう。法華経では方便品にのみ「竹」がみえる。「竹」に着目した人物は法華経一文字一文字を知悉している。この「竹」が見返絵の葦手絵と一体の構想・表現であることは明かである。

方便品の見返絵は、厚い銀砂子地に汀の光景を描く。おだやかな線描で土坡をかさね、ひかえめに墨皴もそえて、その上には松樹と紅葉を配し、大和絵の情景をつくる。一見何でもない風景のように思われるが、画中に多くの「葦」を配しているのは端装金具に「竹」を表すのと同様に方便品本文を意識しているとみられる。また蛇籠、板子を汀に配し、いわゆる葦手文字で「加」「と」「ぬ」をちらしている。土坡上の松樹と紅葉がいずれも幹を交差させるなど、図中に記号的に配されたと思われる図様が目立つ。こうした葦手絵の各々の図様(部品)が、伊行筆葦手本和漢朗詠抄に近似していきわめて注目される。なお図中の樹木の表現は序品第一に同様である。その序品第一にも葦手文字を散らした撫子の表現が見られる。この撫子は倭漢朗詠抄中にしばしば描かれる。その外にも倭漢朗詠抄に見られる葦手文様・文字と平家納経葦手絵とは共通点が多い。水鳥、岩、飛鳥、片輪車、土坡、流水、草木、葦手文字などの多くの文様・文字にわたる。

一方この序品第二の本文写経は、きわめて特色のある筆跡である。化城喻品第七、普門品第二十五もこれと同様である。涌出品第十五もこれに近い。書道史の方面の研究によれば、これこそが藤原伊行の筆であると目される。「筆をやや右に傾けた側筆で、右肩上がりの特徴的な字形」は、写経の書風の典型型である藤原定信の書風(「定信様」)に近いが、平家納経成立時には定信はすでに逝去していると推測されるので、その子伊行がもつともその筆者にふさわしい。なお定信の姉は待賢門院に女房中納言の名前で出仕していて、定信は久能寺経の譬喻品第三の本

文写経の筆を執ったという。⁽⁹²⁾ 平家納経のその他の巻の筆跡の書風分析については、筆者の力の及ぶところではないが、ここでは先学の研究に導かれて、藤原伊行の関わり方について推測をした。世尊寺流の能書にしてすぐれた歌人・文学者でもあった伊行が、平家納経の本文写経及び葦手絵の構想、ひいては平家納経の全体構想に関わったことは十分に可能性のあることではないだろうか。伊行が自ら葦手絵をも描いたことは、その女、建礼門院右京大夫が、

(藤原多子)
大皇太后宮より おもしろき絵どもを (建礼門院) 中宮の御方へまゐらせ

させ給へりしなかに、むかして、のもとに人の手習ひしてこ
とばか、せし絵のまじりたる いとあはれにて

めぐりきてみるにたもとをぬらすかな (93) 絵島にとめしみづぐきのあと
からみても明かであろう。

八 結

平家納経の見返絵のうち、『源氏物語』に関連づけて解釈できると思われるものについて、縷々考えてきたが、結局、藤原伊行という源氏研究家の存在が大きく浮かび上がってきた。平清盛が自身の中に持ち合わせていた龍神（龍王・龍女）信仰が『法華経』と『源氏物語』に結びつたためには、文学者であり、一方また能書家でもあった伊行との出会いを想定しなければならぬだろう。

ただし、上記は一つの可能性を示したものであり、まったく別様の解釈も可能であろう。総合して平氏が強い勢力を維持した平安末期のきわめて成熟した文化現象の中で、平家納経が理解されるべきであるのは当然であり、その際にはどうしても『源氏物語』を避けて通ることはできないのではないかと、というのがここでの私の結論である。

はじめにことわったように、平家納経の見返絵は多様である。したがって、まったく別の観点から、ある一群の見返絵の特徴を論ずることも可能であろう。

すなわち、序品の見返絵が、京都国立博物館本普門品見返絵のように、図中に経文を漢字で散らすのに対して、葉王品の場合のようにそれを仮名まじりで散らし、モチーフの重要な要素となしているものや、『梁塵秘抄』の今様歌や、和泉式部の和歌を装飾のモチーフにした嚴王品の表紙絵、見返絵の存在もある。⁽⁹⁴⁾ 詳細については割愛したが、制作に際して複雑なモチーフが働いたであろうことは言うまでもないだろう。蛇足だが、平家納経の発装金具の意匠も看過されるべきではない。発装金具のうちに見られる、方便品の「竹」や、化城喻品の「不動」（俱利迦羅龍劍）は、『法華経』を知悉した知識がなければおそらく発想できないものだろう。

平安時代後期の院政期から平氏政権の成立期、十二世紀中期から後半にかけては法華経見返絵でも注目すべき作例が多い。平家納経も広くはそうした中で位置づけられるべきであり、そう考えたときに平家納経見返絵にさまざまな種類のものがあるのが、もつとも異例に感じられる。

比較のために一例をあげれば、香川県の色紙法華経（見返絵は紫紙銀地彩色）の場合がある。香川県本は、少なくともその彩色見返絵については、平家納経に先行する作例と思われるが、物語絵様によるのではなく、法華経の心ばえを細密画で描いていて平家納経とはまったく異質の作品である。ところが、巻第五では、龍女成仏のモチーフが大きく扱われていて、その点では平家納経と同様である。図像的な特色も互いにきわめて近似して興味深い。⁽⁹⁵⁾

また香川県本を別の見方で見れば、図中の細密な山水表現は徳川・五島本の源氏物語絵巻に散見する山水表現ときわめて近似する点があり、

また一方これは平家納経中の山水表現にもより整理された仕方で見られるところである。源氏物語絵巻、法華経ともに享受者は重層している。荷担者の側から見た整理も必要であろう。彩色を重ねて絵を作り上げるところは、先行する物語絵に近い。この特別な色紙法華経に女性が関与していることが想像される。

注目すべきは、写経八巻のうち、全巻に「一校了」の奥書があり、さらに巻一、巻六、巻八には添えるように「志ん女(の)かく」などと奥書があることである。かつて私は「しんにょ」なる女性をこの写経の制作者と想像したことがあるが、ここでこれを訂正しておきたい。なお詳細な検討が必要と思われるが、「一校了」と「志ん女かく」を同筆とみ、すなわち本文写経は、「志ん女かく」の筆跡とみて、これを剃髪後、法名を「眞如覺」と称した建礼門院徳子自身の署名と考えたい。ただし、建礼門院徳子の在世年および出家時の年齢から考えて、本文が書写されたと推測される年代と、この法華経見返絵の制作年代とはとうてい重なり合わない。この潇洒な色紙法華経が、建礼門院の身近に伝わったものであるとすれば、まことに興味深いが、この問題の解決のためには、さらに詳細な観察と考察が必要であり、今後の課題としておきたい。⁹⁶ 見通しては、香川県本色紙法華経の彩色見返絵は、源氏物語絵巻と平家納経を結ぶ線上にあり、その見返絵が、何らかの必然的な事情で建礼門院に伝わったものであるうとしておきたい。さらに想像すれば、平清盛の盟友であった藤原通憲(信西)の妻の、紀二位局藤原朝子などの名が浮かんでくる。

さらに一件、平家納経をめぐる気になる存在に、厳島神社に伝わる檜扇(国宝)がある。現状では檜の薄板三十四枚を組み合わせ、蝶・尾長鳥形の金銅製要金具で留めている。全面に白土下地をほどこし、さらに雲母引きをした上に、金銀の切箔、禾、砂子、微塵をまき、濃彩の絵を描

いている。図様は、画面左に洲浜から立ち上がる松樹をあらわし、その傍らに一羽の鶴が配される。右には、手に桧扇を持つ男性の貴族(薄い青色の着衣に銀の浮線綾文)と、その妻と想われる女性(黄色の着衣にエンジ赤の文様)、また童女(黄色の着衣上に、青色の楓文。色線による衣文線)が一人、右手で鶴を指し示すようである。三人の上方には霞らしい雲形がある。人物の表情はいわゆる引目かぎ鼻による。画中には松樹の幹やその根元の土坡にそって葎手文字も散らしている。何かの和歌か、今様が隠されているのだろうか。またその裏面には右手洲浜上に紅梅が立ち上がり、その傍らには、熏煙が立ちのぼる火取が二口配される。左手の水流には片輪車が置かれている。

『厳島宝物図絵』によれば、この表の画題はおそらく正月子日の情景であり、「子日する中にそだちてみどりなるさかの小松かすみたなびく」の歌意をあらわしたものと云う。また裏は、「ちる梅の色も匂も添ひつるになどかとはる、人はなからん」の歌意を表したものである。これによれば、表の図様は、『源氏物語』の「初音巻」にちなむと考えるべきものかもしれない。ところでこの檜扇は、承安二年(一一七二)二月十日に、建礼門院徳子が厳島社に寄進した「御扇小松重薄様裏之」にあたるものか、あるいは承安四年(一一七四)三月二十六日に、建春門院が厳島社の「中御前」のために寄進した「公家御装束一具」のうちのものかと推測される。建春門院か建礼門院かいずれの近くに伝来したものと推測される。⁹⁷ 図様の表現は平家納経に先行する古様さを示していて、源氏物語絵巻と平家納経をつなぐべき資料として位置づけられよう。

このほかに厳島社には、承安三年(一一七三)には八面の舞楽面が寄進された。この内、還城楽と抜頭面は清盛、納曾利と陵王面は時子、二ノ舞と案摩(亡失)を平盛国(清盛郎党)が寄進している。清盛寄進の二面は、清盛祖父正盛が造営した尊勝寺の面を仏師行明が模したものの。時

子寄進の陵王面は龍の頭上に舍利容器状の塔形を取り付ける異形のものであって、納曾利とあわせてともに龍王に淵源があることを想像させる。平家納経をとりまく状況はいよいよ複雑さを増していくばかりである。その周辺の事情を考察したが、題名にあるとおり「雑考」であり、いささか民俗学的方法に偏りすぎたかの感がある。しかし平家納経の実体に迫るにはこうした方法も有意義なことではないかと考えている。今後はさらに観察と考察を重ねながら、より具体性のある結論を目指していきたい。諸賢のご批判を乞いたい。

註

- (1) 拙稿「法華経見返絵の展開」、『法華経—写経と荘嚴』所収、奈良国立博物館、一九八七年。
- (2) 拙稿「我が国における仏教説話絵の展開」、『仏教説話絵』所収、奈良国立博物館、一九九六年。
- (3) 河田貞「法華経絵意匠の展開—平家納経経箱の装飾文を中心として—」、『仏教芸術』一三二号、一九八〇年。
- (4) 内藤栄「密観宝珠形舍利容器について」、『鹿園雑集』創刊号、一九九九年。
- (5) 『東長大事』高崎・慈眼寺藏 嘉暦二年(一三二七)成立。
- (6) 杉橋隆夫「四天王寺所藏「如意宝珠御修法日記」・「同」紙背(富樫氏関係)文書について、『史林』第五三卷三号、一九七〇年。
- (7) 阿部泰郎「宝珠と王権—中世王権と密教儀礼—」、『岩波講座東洋思想』第一六卷日本思想二所収、岩波書店、一九八九年。
- (8) 大覚寺聖教・文書研究会「大覚寺聖教・文書」、『古文书研究』第四〇号、一九九五年。
- (9) 田中貴子『外法と愛法の中世』、砂子屋書房、一九九三年。
- (10) 舍利と宝珠同体のことを明確に述べる(『秘抄』卷十四)。
- (11) 『大日本史料』四一四、建久三年四月八日条に関係史料が掲載されている。
- (12) 『胡宮神社文書』、写真版が赤松俊秀『平家物語の研究』(法蔵館、一九

- 八〇年)にある。
- (13) 文書「仏舍利相承次第」は清盛白河院皇胤説の根拠となる史料であり価値は高い。清盛皇胤説には諸説があるがここで深くはふれず、ただ竹内理三氏の肯定的研究(『日本の歴史』六武士の登場、中央公論社、一九六五年)にしたがいたい。『平家物語』は清盛の父は白河院、母は祇園女御であるとする。
- (14) 『今鏡』に關連の正盛・忠盛説話、『古事談』に忠盛説話がみえる。
- (15) 以下、和田英松『国史国文之研究』(有山閣、一九二六年)による。
- (16) 『中右記』長治二年十月二十六日条。
- (17) 『中右記』嘉祥元年七月五日条。
- (18) 『中右記』天仁元年二月十六日条。
- (19) 『一条法眼記』等(杉山信三『院家建築の研究』、吉川弘文館、一九八一年)。
- なお、『永昌記』天治元年(一一二四)五月二十五日条百鉢愛染供養の記録があるが、これは白河院のために仁和寺寛助が導師となる。寛助は晩年は平忠盛の寄進を受けて東南院を開創し、等身の尊勝仏頂尊、大威徳明王を安置した。
- (20) 『殿曆』永久元年十月一日条。『長秋記』同日条。
六波羅蜜堂はこれより先、天永元年(一一一〇)に完成供養された。導師は範俊である(『江都督納言願文集』)。範俊弟子の範延は正盛の男(高橋昌明『清盛以前—伊勢平氏の興隆—』、平凡社、一九八四年)。
- (21) 『長秋記』大治四年七月十六日条。
- (22) 『中右記』大治四年閏七月二十五日条。
- (23) 『二十二社註式』には承平五年(九三五)の太政官符を掲げている。村山修一「祇園社の御霊神的發展」、『本地垂迹』所収、吉川弘文館、一九七四年。
- (24) 京都・大蓮寺藏。
伊東史朗「祇園社舊本地觀慶寺薬師如来立像について」、『國華』一一三二号、一九九〇年。
- (25) 『中右記』大治二年六月十四日条。
- (26) 『中右記』大治四年六月十四日条。
- (27) 『中右記』長承二年六月十四日条。
- (28) 『山槐記』治承三年六月十四日条。
- (29) 『続古事談』第四「神社仏寺」に、「祇園ノ宝殿ノ中ニハ龍穴アリトナ

- ムイフ。延久ノ焼亡ノ時、梨本ノ座主ソノフカサヲハカラムトセラレケレバ、五十丈ニヲヨビテ猶ソコナシトゾ（下略）とある。
- (30) 『葦籬内伝金鳥玉兎集』所収の「祇園牛頭天王縁起」（西田長男「祇園牛頭天王縁起の諸本」、『神道史研究』第十卷第六号、一九六二年）にテキストと解説がある。
- また、河原正彦「祇園御霊会と少将井信仰―行疫神と水神信仰との抵触―」、『日本文化史論集』、一九六二年。脇田晴子『中世京都と祇園祭』、中央公論新社、一九九九年など。
- (31) 『女神たちの日本』、サントリ―美術館、一九九四年。
- (32) 『台記』久安三年六月十五日条。『本朝世紀』同日条。
- (33) 後年、建礼門院徳子の御産時には大神宮、今熊野、伊都岐島とともに祇園社にも祈られた。清盛が晩年住した福原和田京の雪御所北東近傍にも祇園社が坐すことも看過できない。
- (34) 田中氏前掲著一五七―一六〇頁。
- (35) 赤松俊秀「平清盛の信仰について」、『平家物語の研究』所収、法蔵館、一九八〇年。
- (36) 武笠朗「平清盛の信仰と平氏の造寺・造仏」上下、『実践女子大学美術史論』第一三・一四号、一九九八・一九九九年。
- (37) なお、その後「仏舍利相承次第」に清盛から舍利を伝授したとある観音房の実在が確認される（静岡・願成就院蔵、木像不動三尊及毘沙門天立像胎内納入五輪塔形銘札に「執筆南無観音」とあるのがその人だらう。当館の岩田茂樹氏から御教示を得た）。観音房は清盛重臣の平盛国の子か孫である。さらに舍利は観音房から高倉局に相伝したとする別伝（「牙舍利分布八粒」『来迎寺文書』、高倉局は澄憲女）があつて、この相伝には醍醐寺有縁の尼真阿弥陀仏（信西孫、一説に阿波内侍と同一人）が関わる（土谷恵「願主と尼」『シリーズ女性と仏教1 尼と尼寺』所収、平凡社、一九八九年。田中前掲書など）。真阿弥陀仏は鎌倉初期の造仏結縁者としてしばしば名が見える。これ以上煩瑣を避けるが文書「仏舍利相承次第」の価値・意味は看過できない。
- (38) 『日本後記』卷二十一、弘仁二年七月己酉日条。
- (39) 『日本三代実録』卷一貞観元年正月二十七日条、同卷二貞観元年三月二十六日条、同卷十四貞観九年十月十三日条。
- (40) 松岡久人『安芸厳島社』、法蔵館、一九八六年。
- (41) 『左経記』寛仁元年十月二日条。
- (42) 『平家物語』大塔建立、『古事談』第五神社仏事、『大塔興廢日記』など
- (43) 「願文」。
- (44) 「藤原成範等連署書状写」（赤松氏の前掲35論文にテキストがある）。
- (45) 『山槐記』保元四年正月二十一日条。
- (46) 赤松氏前掲35論文。
- (47) 『山槐記』永暦元年八月五日条。
- (48) 承安元年（一一七二）の「伊都岐島社神宝調進状」（野坂文書三一五、『神道大系』神社編「厳島」所収）。
- (49) 「女御殿御衣奉納日記」（新出厳島文書七二、『神道大系』神社編「厳島」所収）。
- (50) 『本朝文集』（『神道大系』神社編「厳島」所収）。
- (51) 「御手摺書正躰供養日記」（野坂文書三二〇、『神道大系』神社編「厳島」所収）。
- (52) 『山槐記』治承二年十一月十二日条。
- (53) 治承四年（一一八〇）の「高倉院厳島御幸記」（『神道大系』神社編「厳島」所収）。
- (54) 『愚管抄』同卷五「安徳」。
- (55) 『平家物語』卷第三「大塔建立」では「さては安芸の厳島、越前の氣比の宮は、両界の垂跡」とあり、『古事談』第五神社仏事には「日本国之大日如来ハ伊勢大明神ト安芸之厳島也 太神宮ハアマリ幽玄也 汝適為国司 早可奉仕厳島」とある。さらに『法暦問記』（『群書類従』卷四五八）には「安芸厳島ハ胎蔵界也」とある。いずれも鎌倉時代成立の資料だが、伊都岐島神の本地仏は胎蔵界の大日如来としている。ちなみに胎蔵界大日の三昧耶形は五輪塔である。
- (56) 『山槐記』治承二年十月十四日条。
- (57) 高橋昌明「福原の夢 清盛と対外貿易」、『歴史のなかの神戸と平家』所収、神戸新聞総合出版センター、一九九九年。
- なお、清盛の千僧供養は、次の通りである。
- 仁安四年（一一六九）三月二十一日、福原にて、（『兵範記』）。
- 承安元年（一一七一）十月二十三日、福原にて、（『玉葉』）。
- 承安二年（一一七二）三月十五日～十七日、福原にて、（『百鍊抄』『玉葉』）。
- 同年十月十五日～十七日、福原和田浜にて、（『百鍊抄』『玉葉』）。
- 承安三年（一一七三）三月十四日～二十日頃、福原にて、（『玉葉』）。

承安四年(一一七四)十月、嚴島にて、(『伊都岐島千僧供養日記』)。
安元元年(一一七五)十月十一日(十五日頃、福原にて、(『玉葉』)。
安元三年(一一七七)三月十八日(二十日、福原にて、(『玉葉』『百鍊抄』)。

安元三年(一一七七)十月、嚴島にて、(『嚴島千僧供養日記』)。

(58) 平家納経を考えるときに香川県本紫紙地彩色見返絵法華経八巻は関連性が高いが、ここでは両者の様式的共通点の検討とその意味の考察には立ち入らず別稿を期す。

(59) 徳子の年齢については二説があり、『皇代曆』『女院次第』によれば平家納経時には八歳、『女院記』『華頂要略』『山槐記』では十歳となる。

『女院小伝』は「承安元年十五歳」とするが、傍注をして「十七歳」としている。一般には『山槐記』治承二年(一一七八)六月二十八日条に「中宮 徳子、御歳廿四、六波羅入道前太政大臣二女、母贈左大臣時信公女、二品時子尼」とあることによつて、久寿二年(一一五五)の生まれとされる。しかし、『山槐記』写本の状況はクリアではない

(藤原重雄氏の御教示による)。また亀田孜氏は従来の徳子二女、盛子三女とするのに疑問をいだき、姉妹の順を逆にすると考える(亀田孜「平家納経の絵と今様の歌」、『仏教芸術』第一〇〇号、一九七五年)。なお、前掲注(49)の文書は、徳子を「六波羅太政大臣三女」とする。また田中重久氏は徳子生年を保元二年(一一五七)とする(田中重久「公卿平氏と伊賀平氏の分析」、『古代学』第十五卷第二号、一九六八年)。須田春子氏は、盛子(白河殿)を保元元年(一一五六)生まれ、徳子より一つ年長の異母姉とする(須田春子「女人入眼の日本国」、『平氏・清盛傘下の女院』、『古代文化論叢』第六号、一九八六年)。したがつて徳子は保元二年生まれとしている。列記して後考に俟つ。

(60) 前掲注(1)(2) 拙稿。

(61) 後藤丹治「源氏一品経と源氏表白」、『国語国文の研究』第四八号、一九三〇年。

寺本直彦「源氏物語受容史の諸問題」第二節、『源氏物語受容史論考』後編所収、風間書房、一九七〇年。

久保田淳「『源氏物語』と藤原定家、親忠女及びその周辺」、『藤原定家とその時代』所収、岩波書店、一九九四年。

(62) 『今鏡』巻十「つくり物がたりのゆくゑ」(藤原為経寂超著、嘉応二年

一一七〇成立か)が源氏物語狂言綺語感の初見である。「妄語などいふべきにはあらず。わが身になき事を、あり顔にげにげにといひて、人のわるきをよしと思はせなどするこそ、そらことなどはいひて、罪得る事にはあれ」とある。ついで『宝物集』巻五(平康頼著、治承年間成立)には、「マチカクハ紫式部カ夢ニ虚言ヲ以源氏物語ヲ造シ故ニ地獄ニ墮テ苦ヲ受タリト見ヘシ故ニ 早源氏物語ヲ破リ捨テ、一日經ヲ書テトブラヘシト云ケルトテ 歌読共集テ務ナシアヒタリシ也」とあり、やや降つて『今物語』(藤原信実著、仁治元年一二四〇頃成立)に、「ある人の夢に、その正体もなきもの、影のやうなるが見えけるを、「あれは何人ぞ」と尋ねければ、「紫式部なり。そらことのみ多くし集めて、人の心をまどはすゆゑに、地獄におちて、苦を受くる事いとたへがたし。源氏の物語の名を具して、なもあみだ仏という歌を、巻ごとに人々に詠ませて、我が苦しみをとぶらひ給へ」と言ひければ、「いかやうに詠むべきにか」と尋ねけるに、きりつばに迷はん闇も晴るばかりなもあみだ仏と常にいはんとぞ言ひける。」とある。『宝物集』以外は親忠女の前の夫とその間の孫であることに注意。

(63) 『源氏一品経 導師同前』(『拾珠抄』第一所収) 澄憲著

「(前略) 紫式部亡霊昔託人夢 告罪根重 爰信心大施主禪定比丘尼 一爲救彼制作之幽魂 一爲濟其見聞之諸人 殊勸道俗貴賤 書寫法華二十八品之眞文 卷々端圖源氏之一篇 蓋轉煩惱爲菩提也 經品々即宛物語篇目(中略) 今比丘尼濟物 讎數篇艶詞之過 歸一實相之理 爲三菩提之因 彼一時此一時也 共離苦海同登覺岸」

(64) 『新勅撰集』卷第十釈教の藤原宗家の歌。宗家は治承三年(一一七九)権大納言、文治五年(一一八九)没。

(65) 『藤原隆信朝臣集』下釈教の歌。隆信(一一四二—一二〇五)は正四位下左京大夫に至る。

(66) 久保田氏前掲注(61) 著書三〇〇頁。

(67) 寺本氏前掲注(61) 著書「後編第二節 中世歌壇における詠源氏物語和歌」の六八八頁から六九七頁から引用すると、

(1) 『長秋詠藻』中、恋歌(一一七八献進)

寄源氏名恋

恨みてもなほたのむかな滯標深き江にある印と思へば

(2) 『千載集』巻十四、恋四(一一八七成立)

寄源氏物語恋といふ心をよみ侍りける

見せばやな露のゆかりの玉かづら心にかけてしのぶけしきを
逢坂の名を忘れにし中なれど堰きやられぬは涙なりけり

(3) 『清輔朝臣集』(清輔、一一〇四〜一一七七)

寄源氏恋

逢ふ事はかたびさしなる横ばしらふす夜も知らぬ恋もする哉

(4) 『頼政卿集』(頼政、一一〇四〜一一八〇)

寄源氏恋 歌林苑

人しれず物をぞ思ふ野分してこ簾吹く風にひまはみねども

(5) 『忠度朝臣集』(忠度、一一四四〜一一八四)

寄源氏恋

あふとみる夢さめぬればつらきかな旅ねの床にかよふ松かせ

(6) 『経正朝臣集』(一一八二作進)

寄源氏恋

おもひかねこひなぐさめのゑあはせにきみがすがたをうつしける

かな

(7) 『実家卿集』下、恋(一一四五〜一一九三)

源しのまきによする

むねにたくおもひぞたぐふかがり火のかけはなれたつ人をこふと

て

(8) 『小侍従集』(一一二一ごろ〜一二〇一)

源氏によする恋(寄源氏恋)

帚木のありしふせやを思ふにもうかりし鳥の音こそ忘れぬ

(9) 『明日香井和歌集』恋(雅経、一一七〇〜一二二一)

寄源氏恋

もらすなよ只手ならひとことよせてかき流したる水茎のあと

(10) 『信生法師集』(一一七二〜一二五九)

寄源氏名恋

ほに出ぬかずならぬ身やうき舟のしたにこがれて世をわたるらん

など。

(68) 谷山茂「平家の歌人」、『和歌文学の世界・第一集』、一九七三年。

平氏の人々と御子左家及び藤原為忠の家系は、『源氏物語』を通じて近しい関係にあったと思われる。

なお、忠盛の詠歌の「明石の浦風」とは、『源氏物語』「明石巻」の明石の入道が舟を仕立てて須磨浦に光源氏を迎えに来るといふ設定と対

応している可能性がある。

(69) 寺本氏前掲注(61) 論文を参照。

(70) 住吉明神とは、表筒男命、中筒男命、底筒男命の三神であり、記紀に

伊弉諾尊が黄泉の国の汚穢を清めるため、筑紫の日向で禊祓をしたと

きに海から生まれた神とされる。『日本書紀』では神功皇后に神威をあら

わしたとされる。撰津・住吉神社にはこの三神を祀り、のちに神功

皇后をも祀った。『万葉集』巻第十九(四二四五)には、「天平五年贈

入唐使歌一首」があり、海上往來の安全を祈る神として早くから信仰

されたことが知られる。

(71) 藤原克己「たけき宿世―明石の君の人物造型―」、『国文学解釈と鑑

賞』別冊、一九九八年五月。

多田一臣「須磨・明石巻の基底―住吉信仰をめぐって―」、『国文学解

釈と鑑賞』別冊、一九九八年六月。

(72) 石川徹「光源氏須磨流滴の構想の源泉―日本紀の御局新考―」、『平安

時代文学論』所収、笠間書院、一九八〇年。

(73) 石川氏前掲(72) 論文の二七七頁に、「夜光玉」とは龍王の女の持物で

あるとの解釈について詳説がある。

なお、柳井滋「源氏物語と靈験譚の交渉」(『源氏物語研究と資料―古

代文学論叢第一輯―)所収、武蔵野書院、一九六九年)にも言及があ

る。

(74) 光源氏の六条邸は春夏秋冬の四季を強く意識したものであり、それは

四方に四季を配した海龍王の館と同じ意味を持つ。石川徹「明石の上

論」(『平安時代文学論』所収)を参照。

(75) 『弘安源氏論義』に『源氏物語』は、「世にもてなすことは、すべらぎ

のかしこき御代にはやすくやはらげる時よりひろまり(中略)古より

かく伝はれるなかに、堀川の院の御時よりぞもてなされける」とあ

る。

(76) 『長秋記』元永二年(一一一九)十一月二十七日条によれば、白河院政

鳥羽天皇の時に源氏物語絵巻が制作が企図された。

「午刻参院、加賀権守忠基於中宮御方申昇殿慶。平等院僧正被参、

依中宮御惱平癒、昨日被給院御馬云々、基次語云、今於除目、三位中

将可任中納言給(中略)入夜参東面御方、上皇每事有思□云々、参中

宮御方、以中将君被仰云、源氏絵間紙調進、申承由、又上皇仰云、画

図可進者、同申承由」

- (77) 稲賀敬二「源氏秘義抄」附載の仮名陳情―法成寺殿・花園左府等筆廿卷本源氏物語絵巻について―、『国語と国文学』、一九六四年六月号。寺本直彦「源氏絵陳状考(上)(下)」、『国語と国文学』一九六四年九月号・十一月号。
- 伊井春樹「院政期源氏学の諸相―『源氏物語注釈』所収古注逸文の性格―」、『源氏物語注釈史の研究 室町前期』所収、桜楓社、一九八〇年。
- (78) 秋山光和「源氏物語絵巻の構成と技法」、『平安時代世俗画の研究』所収、吉川弘文館、一九六四年。
- 秋山光和「源氏物語の情景選択法と源氏絵の伝統」、『平安時代世俗画の研究』所収、吉川弘文館、一九六四年。
- 秋山光和「源氏物語絵巻」(新修日本絵巻物全集)、角川書店、一九七五年。
- 秋山光和「院政期における女房の絵画制作―土佐の局と紀伊の局―」、『古代・中世の社会と思想』所収、三省堂、一九七九年。
- 徳川義宣「源氏物語絵巻」成立の背景とその形態、『日本絵巻大成1』所収、中央公論社、一九七七年。
- なお、『長秋記』にあらわれた源氏物語絵巻と、建礼門院右京大夫の女院御所に伝来した源氏物語絵巻との関係、更には現存の徳川黎明会及び五島美術館本の源氏物語絵巻との関係については、別稿を要する。
- (79) 池田亀鑑「源氏物語大成」巻七第二章第四節、中央公論社、一九五六年。
- (80) 糸賀きみ江「恋と追憶のモノローグ」、『新潮日本古典集成建礼門院右京大夫集』解説、新潮社、一九七九年。
- (81) 須田春子「女人入眼の日本国―平氏・清盛傘下の女院―」、『古代文化史論攷』第六号、一九八六年。
- (82) 『兵範記』仁安元年九月七日条。
「取御願文 内藏権頭長光朝臣作之 宮内少輔伊行清書 用紫裏白色紙 無薄 有北政所御署」
- (83) 『兵範記』保元三年(一一五八)十二月十八日条。
- (84) 『兵範記』長寛二年(一一六四)閏十月十七日条。
- (85) 『兵範記』久寿二年(一一五五)十月二十三日条。
於法性寺殿最勝金剛院、被行故北政所御法事
「御願文、挿鳥口、倚立御経机西方、散位実重朝臣作進之、宮内小輔

- 伊行清書之、用紫無薄色紙、皇嘉門院別当左衛門督重通卿加署」
久保田淳「平家文化の中の『源氏物語』」、『文学』第五十卷第七号、一九八二年。
- (87) 『世尊寺現過録、懷雅記』(貞治元年―一三六二年成立)による。
- (88) 白畑よし「藤原伊行筆倭漢朗詠抄下絵解」、私家版、一九八九年。
- (89) 生澤喜美恵「平家文化とその周辺」、『日本文学史』第四卷変革期の文学―所収、岩波書店、一九九六年。
- (90) 小松茂美「小松茂美著作集」第十三卷、平家納経の研究五(四四三―四四五頁)、旺文社、一九九六年。
- (91) 田中塊堂「書道全集」第十八卷解説、平凡社、一九五六年
ただし、これに対して後に小松氏は清盛自筆とされている(小松氏著作集第十三卷四八〇頁)。
- (92) 島谷弘幸「一品経の白眉『平家納経』の書」、『平家納経と巖島の捧物』所収、広島県立美術館、一九九七年。
- (93) 岩波文庫本『建礼門院右京大夫集』の七八番歌。
- (94) 白畑よし「平家納経の歌絵と芦手―梁塵秘抄による今様の歌―」、『美術史論集』1号、神戸大学美術史研究会、二〇〇一年。
- 白畑氏の諸論攷から得るところがたいへんに多かった。記して学恩に感謝したい。
- (95) 白畑よし「松平伯爵家蔵法華経見返絵に就いて」、『美術研究』一三七号、一九四四年。
- (96) 『女院次第』に「元暦三五廿八爲尼 廿九歳 眞如覺」、『后宮略伝』に「文治元年出家 法名眞如覺」とある。
なお、橋村愛子氏(兵庫県立歴史博物館)は、香川県本色紙法華経を建礼門院の所持本と解釈している。
- (97) 注(49)及び、「建春門院神宝注文」(野坂文書三一六、『神道大系』神社編巖島所収)。

謝辞

巖島社の野坂元良宮司には、当館の特別展に際して平家納経の御出陳を再三お許しいただきました。ここに深甚の謝意を表します。また一九九七年に広島県立美術館で開催された「平家納経と巖島の宝物」展からは多くの示唆を得ました。併せて企画者に感謝申し上げます。

(かじたに りょうじ 当館学芸課長)

〔編集後記〕

『鹿園雑集』第二・三合併号をお届けします。

本号には多彩な内容の論文三編と研究ノート一編を収めることができました。外村中氏による論文は、当館で例年実施している海外所在日本美術品調査のケルン東洋美術館における調査の際にご協力頂いた同氏より、本紀要にご寄稿頂き、掲載に至ったものです。次号以降は論文に限らず、博物館に関わる様々な活動成果も収録していきたいと思っております。

〔編集委員〕

内藤 榮

高橋 照彦

宮崎 幹子

〔英文翻訳〕

マリサ・リンネ

〔写真提供〕

宮内庁正倉院事務所

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雑集

第二・三合併号

平成十三年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

奈良市登大路町五〇番地

印刷 株式会社天理時報社

天理市稲葉町八〇番地

THE *HEIKE NŌKYŌ* MANUSCRIPTS AND TAIRA KIYOMORI

KAJITANI Ryōji

Nara National Museum

The *Heike nōkyō* is a set of sutra manuscripts comprising the twenty-eight chapters of the *Lotus Sutra*, opening and closing chapters, a dedication, and other sections, for a total of thirty-three scrolls. These manuscripts were copied one chapter per scroll under the direction of Taira Kiyomori (1118-81) and other members of the Taira clan, before being placed in the *Bronze Sutra Container with Gold and Silver Ornamentation of Clouds and Dragons* and donated to Itsukushima Shrine (present-day Hiroshima Prefecture) in 1164. Kiyomori had ample knowledge of earlier large-scale sutra copying projects, such as the *Kunōjikyō* (alternately *Ipponkyō shakyō*) manuscript of the *Lotus Sutra* sponsored by retired Emperor Toba (1103-56) and his wife Taikenmon'in (1101-45), however he conceived and actualized the *Heike nōkyō* under an entirely new concept.

One factor motivating the creation of the *Heike nōkyō* may have been Kiyomori's belief in Shintō dragon deities (J. *ryūjin*). Though Kiyomori was the adopted son of Taira Tadamori (1096-1153), his natural parents were the retired Emperor Shirakawa (1053-1129) and his lover, the younger sister of Gion no Nyōgo (dates unknown). Kiyomori's was raised by his aunt, who was closely related to the Gion Shrine in Kyoto (a Shinto shrine that worshipped dragon deities). A deeply religious woman, Gion no Nyōgo inherited from Shirakawa, and then passed on to Kiyomori, a wish-granting jewel – the attribute associated with the ascent to Buddhahood of the dragon king's daughter in the twelfth “Devadatta” chapter of the *Lotus Sutra* – and Buddhist relics, which are strongly associated with wish-granting jewels. This background gave Kiyomori a deep grounding in ancient forms of indigenous dragon deity worship.

At the same time, Kiyomori was also involved in dragon worship through his participation in Buddhist rituals related to the *Lotus Sutra*. One such rite was the Sensō kuyō, in which one thousand priests chanted the scripture in order to appease the dragon king. This Buddhist ceremony was held frequently near Kiyomori's residence at Fukuhara (the Sannomiya part of Kobe, Hyogo Prefecture) and at Itsukushima Shrine. One of the most famous chapters of the *Lotus Sutra* is the aforementioned “Devadatta” chapter (J., Daibadattahon), in which the daughter of the dragon king achieves enlightenment. One can imagine that as Kiyomori was conceiving the *Heike nōkyō* project, the image of the dragon king's daughter appearing from the depths of the ocean would have resonated in his mind as a metaphor for his then eight-year-old daughter Noriko (1157-1213, later Kenreimon'in, wife of Emperor Takakura).

Further associations with dragon worship can be found in literary allusions within *Heike nōkyō* frontispiece paintings. The culture of the Taira clan closely emulated that of the imperial court. It was just around this time that courtier Fujiwara Koreyuki (?-1175) wrote *Genji shaku*, the first commentary on the epic novel of court life, *The Tale of Genji*. Koreyuki was close to the Taira clan and has been confirmed as one of the calligraphers of the *Heike nōkyō*. We can therefore conclude that the frontispiece paintings to these manuscripts, almost identical in style to the narrative handscrolls of *The Tale of Genji*, evidence the proactive influence of Koreyuki in this project. We can also connect the *Heike nōkyō* with this literary classic through a reference in the novel associating the Akashi family – Genji, the Lady Akashi, whom Genji meets while in exile at Suma, and the Akashi Princess, who later becomes an imperial consort and gives birth to a prince – with the family of the dragon king. This imagery must have held high appeal for Kiyomori. It is my suggestion that Kiyomori associated himself with none other than the Shining Prince, Genji. By including Genji-like representations in the frontispiece paintings of the sutras, I propose that he was praying for the success of both his own future and that of his daughter Noriko.

For these reasons, we can conclude that the *Heike nōkyō* manuscripts reflect in a variety of ways both the culture and beliefs of Taira Kiyomori and the Taira clan.